

「知恵と啓示の御霊」

エペソ人への手紙 1 : 17 - 19

March.6.2022

エペソ人への手紙 1 : 17 - 19 (パウロ)

Preface

先々週から、使徒パウロがエペソ教会員に書き送った祈りの内容について学んでいます。今朝は、17節の「知恵と啓示の御霊」について考えていきたいと思います。

パウロの祈りの内容を一言で言いますと、「神を知れるようにしてください」ということだと前回学びましたが、「神を知るためには知恵と啓示の御霊が与えられなければならない」ということをパウロは知っておりました。

だから、「知恵と啓示の御霊なる神様をお与えくださるよう」に祈ります。

神を知るキリストを知るというのは、「昔一度イエス様を信じて、はい終わり！」というのではなく、ずっと知り続けることです。

言うなれば、信仰とは、神を知り続ける戦いです。

平穏に生きるための戦いでもなく、物事思い通りにするための戦いでもなく、何が正しいか何が間違っているのか白黒はっきりさせる、または好きか嫌いかをはっきりさせる戦いでもありません。

神様が「このようにしましょう」と仰ればそのようにし、「あのようにならなう」と仰ればあのようにな、神様の喜びが私の喜びであり、神様が良いと思われたら、それが私の願いとなること、これが信仰です。

また信仰は、権威をどこに置くのか、誰が主人なのかをはっきりさせる戦いでもあります。

主なる神様が「正しい」と仰れば正しく、「間違っている」と仰れば間違っています。

私たちが正しいと思うことが正しいのではなく、私たちが間違っていると思ふことが間違っていないことが、神様からご覧になった時よくあります。

この時、私たちが誤解することがありますが、それは私の常識、私の倫理、私の道徳をもって信仰を計ろうとしますと、私という人が主人になる危険性に陥ります。

神様が私の主ではなく、神様が私の秘書となり、弁護士となり、代行業者となり、または私が必要な時にお小遣いをくれるお爺ちゃんお婆ちゃんになり、はたまた、プレゼントを運んでくれるサンタクロース程度にしか考えなくなってしまう恐れがあります。

つまり、私たちの信仰において目立ってあらわれる大きな問題は、過ぎるほどの自己中心性です。

私の幸福、私の喜び、私のやりがい、私の思い、神様が何をお喜びになるのかには関心がありません。

私たちは、いつもこのような誘惑を受けながら、神を知ることから、自分を知ることへとばかり視線が向きます。

もちろん自分を知ることが大事なことです、究極のところ、人は、神無くして自分を知ることが出来ません。

私たちが神を知るために、もし、神様が私をお埋めになることを望まれるならば、埋められ、見放されたように感じるところに置くことを望まれるならば、そこに置かれて生きていくこと、これまた信仰です。

今、個人的にエレミヤ書を読んでいるのですが、神を知るために、実際にエレミヤは泥の中に埋められ、命からがらひもじい思いをしたこともありました。

だからこそ、そこで、私たちキリスト者は、「知恵と啓示の御霊をお与えください」と祈るのです。

伝道者の書の言葉を借りて言いますと、「人にとって何一つ益になることのない日の下の出来事に捕えられてしまう視点から、あなたの深い配慮を信頼出来る視点へと移してくださる知恵と啓示の御霊をお与えください」と、

「今置かれているこのところを生き、ここに神を見ることが出来るように、神を知るための知恵と啓示の御霊をお与えください」と祈るのです。

12弟子たちを始めとする何万人もの人たちは、3年間イエス様を見て触って聞いて、体験し経験したにもかかわらず、皆逃げて行き、イエス様を十字架に架けました。

自分の力で、自分の理解で、自分の思う信仰でイエス様を信じはしたものの、それが限界です。

聖霊の助けを、聖霊の満たしを、聖霊の注ぎによる信仰を受けていなかった、求めていなかったための限界です。

それゆえに、「神を知るための知恵と啓示の聖霊をお与えください」というパウロの祈りは、使徒パウロの献げた祈りという枠内に留めて置くものではなく、私たちクリスチャンがクリスチャンとして求めるべき祈りであり、クリスチャンに似つかわしい祈りでもあります。

Part One

少し話が反れますが、3週間程前、大きな衝撃を受けた出来事がありました。

それは月曜日の朝、海に行く時の車中でのことでした。

毎週月曜日の朝4時ごろ家を出て海に行くのですが、その行き帰りの運転中 YouTube で聖書講座や説教を聞くことが私の毎週のルーティンになっているん

です。

で、3週間前の月曜日の朝、いつものように YouTube に繋いで説教を聞こうと思いましたが、J.Y.Park さんという方の一講義2時間の5回シリーズの聖書講座が、画面にポンと出てきました。

皆さん、J.Y.Park さんという方ご存知ですか？

2年程前、Nizi Project というとても話題になった日本テレビのオーディション番組があり、そこで選ばれた9人の女性たちによる NiziU という女性アーティストグループが出来て大ヒットしました。

今は、ソフトバンクの携帯の宣伝で、あの白いお父さん犬と共演しています。

で、その NiziU をプロデュースしたのが、世界的プロデューサーの J.Y.Park という韓国人歌手であり、ダンサーであり、作詞作曲家であり、JYP エンタテインメントという韓国一の芸能プロダクションのオーナーの方なんです。

で、この J.Y.Park さんが行った聖書講座が、YouTube の画面にポンと出て来たんです。

以前から、この方、何か変な宗教にドハマリしているとか、キリスト教系の異端教団にどっぷりつかっているとかといううわさを聞いたことがあったのですが、ところがどっこい正真正銘の正統的な聖書神学と聖書信仰に立った世界のどこに出してもおかしくも恥ずかしくもない本当に素晴らしい10時間の聖書講座だったんです。

なんでこんな変なうわさが生まれたかと言いますと、自宅で友達と2人で始めた聖書の学びがいつの間にか200人規模の聖書の学び会となり、ついには教会となって、どこでも自分がクリスチャンであることを公言し、聖書講座を毎週続けていることから変な噂が立ったそうなんです。

そして、その聖書講義を聞いて衝撃を受けました。

ものすごく聖書に精通しておられるだけでなく、もの静かだけれども聖書の福音を語る情熱が半端じゃないんです。

「今自分が行っている芸能活動も、福音宣教のためであって、ユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のようになって、より多くの人たちに福音を届け、イエス・キリストを信じて天の御国へと導かれる人たちが起こされるためだ」と言ってはばかりず、「もし自分の芸能活動が神様の御旨に合わないならば、いつでもやめる覚悟が出来ています」とまで言いながら、聖書全巻の色々な御言葉を開きながら、純粹に聖書の話だけを語るんです。

衝撃を受けました。

さらに衝撃だったのが、彼のクリスチャンになるまでの過程でした。

日本で言う東大京大みたいな韓国の延世大学で地質学を学びながら、歌手ダ

ンサーとして活動しトップアーティストになって、プロデューサーになって、芸能プロダクションを立ち上げて、韓国ばかりか日本やアメリカでも大成功を収め、人が羨むもの、自分でも手に入れたと思うものすべてを手にしながらも、心の空虚感が埋まらずに、やがて聖書を手に取り貪るように読み始め、1日10時間以上を聖書研究に費やすようになったのが2010年でした。

そして、「聖書が本当だということを確認するためには、イスラエルの歴史と聖書の預言の内容が一致していることを確認する必要がある」と、単独で2ヶ月間イスラエルに行って、観光地巡り等には一切関心が行かず、ひたすらに博物館、図書館、歴史の現場などを見て回りながら、聖書の内容と歴史資料を見比べ、ついに聖書に論理的一貫性を見出して、「ああ、聖書は本物だ」ということを突き止めました。

ただここからが問題です。

「聖書が本物だということは分かった、神様がおられることも分かった、イエス・キリストが人類の罪の贖いのために父なる神様がお送りくださった神のひとり子であることも分かった、そしてそのイエス様が人類の罪のために十字架に架かって下さり、死なれ、復活され、それを信じるものには永遠のいのちが与えられ、天の御国が、神の国が約束されていることも分かった、そしてこの世界は神の世界ではなく、サタンの支配するやがて滅びゆく世界で、どんなにこの世界で神なしで幸福を求めたところで、魂の心の空虚感を埋めることも出来なければ、科学こそ答えだと思わされている見地の限界も知った。

そして何よりも、宗教は人を束縛するが、イエス・キリストという真理は、人を自由にすることが分かった。

だから、イエス・キリストを信じたいし、十分信じるに値する真理であることも分かる。

信じている。信じたい。でも、信じられない。

頭では分かっている、自分の力の限り信じているつもりだけれども、心の魂の奥底から信じられない。」

こういう状態が7年間続きました。

でさらに驚いたのが、そういう状態であっても、聖書に対する論理的な確信はあるので、自宅での聖書講座をずっと続けるんです。

で、もっと J.Y.Park さんご本人を混乱に陥らせたのが、心の底から信じられていない J.Y.Park さんが語る福音を、聖書講座を通して、イエス様を信じていく人たちが自宅の庭に大きなテントを張って聖書の学びをしなければならないほどに、次々と起こされて行くんです。

自分は信じられないのに、信じられていない自分の語る福音を信じていく人が次々と起こっていくことがあまりにも悩ましく苦しかったのか、テレビ番組のインタビューでも、「聖書を頭では理解できるのですが、信じる事が出来ないんです」と、苦悩の表情でポロッと言ってしまう程でした。

そして、2017年のある日、いつものように聖書を読んでいたら、それまで何ともなかった聖書の御言葉、ヘブル人への手紙10:10の言葉がスッと入って来て、頭で理解していたことが心にストンと落ちて、心から真実として信じられる経験を初めてするんです。

頭で理解していることをどんなに信じようと努力しても信じられなかったところから、「信じられてしまった」という体験をして、そこで初めて「ああ、僕は、これで遂にイエス様の仰る救いと平安を得た」という経験をされるんです。

ヘブル人への手紙10:10 (パウロ)

「この『私たち』という言葉の中に自分も含まれる」ということを突如として悟らされてしまうんです。

正に、聖霊なる神様のお働きとしか言いようのない事件を、自分事として体験させられました。

YouTube の聖書講座があまりにも素晴らしかったので、日本語に訳されている本も購入してしまいました。

(J.Y.Park エッセイ 何のために生きるのか? 早川書房)

とても読みやすく、クリスチャン、ノンクリスチャン問わず、すべての人にお勧めできる私個人的に今一押しの本です。

内容の半分が聖書の話なので賛否両論ありますが、私個人的にはかなりお勧めです。

Part Two

すみません。J.Y.Park さんの話が少し長くなってしまいましたが、何を言いたかったのかと言いますと、

私たちがクリスチャンとなり、クリスチャンとして信じているすべての内容は、私たちの学識や経験などによって悟ったものでもなく、澄んだ心や良い行いや努力によって得たものではないということです。

キリスト者としてのそのすべての内容は、私たちから生じ、私たちから生み出されるものではありません。

神を知るための知恵と啓示の御霊によって与えられる、与えられる恵みです。

だからもし、私たちがクリスチャンだと言うのに、「神を知るための知恵と啓示の御霊をお与えください」という祈りを祈ることがないとすれば、キリスト者であるということにおいて、明らかに欠いているところがあるというのを認めざるを得ないでしょう。

クリスチャンは、以前クリスチャンでなかったというところから、クリスチャンになったという経験をします。

クリスチャンホームで育ってもそうですね。親の信じるイエス様から、私の信じるイエス様へとなる経験をしします。

罪の赦しと共に救いを経験し、神の子とされたことに感動と平安を覚えるようになります。

そんな私たちが信じられるようにされて真っ先に感じることは、「以前は知らなかったものを知れるようになり、その知ったことは私の力でもなければ、私から発生したものでもない」ということです。

正に、「聖霊によらなければ、誰も『イエスは主です』と言うこと出来ない」という霊的体験をしします。

でも、ここで終わりではありません。

「イエスは主です」という告白の内容が何なのか、その告白の持つ力、恐れ、偉大さ、とんでもなさ、一つ一つ一生をかけて知るために、信仰を生きていくんです。

聖霊なる神様のお働きがなければ、信仰が私たちの内に生まれることもなければ、信仰を保ち守ることも出来ないのがキリスト者です。

だから、元来キリスト者は、聖霊を求めずにはられません。

聖霊の導きや聖霊の力を求めることは祈りのみならず、生活のすべてにおける源であり、必要不可欠なことだからです。

もし、聖霊の導きや聖霊の力を信仰生活上求めることもなく、求める必要性も感じず、求めたこともないということならば、やはり信仰上、重大な問題があることを深刻に受け止めなければならないでしょう。

Part Three

私たちがイエス・キリストを信じ、知ったそのすべてのことは、私たちの悟りや私たちの産物ではないことを、使徒パウロは、第一コリント2章でこのように明らかにしています。

コリント人への手紙第一2：1－5（パウロ）

パウロが、コリント教会を開拓し伝道牧会していく上で、最も気を付け緊張の糸を緩めなかったことは、論理性に長けた説得力や感情豊かなユーモアなどの言葉自体が持つ人を魅了する力に頼ってイエス様を伝え、それを聞いた人々が実際はイエス様に出会ってもいないし、信じてもないし、知ってもいないのに、その言葉の魅力によって、あたかもイエス様に出会った風、イエス様を信じた風、イエス様を知った風になってしまうこと、

そして聖霊と聖霊の御力の現れによる神理解ではなく、人間的な視点、自己中心的な神観、聖書観、信仰観、教会観をもってキリスト者だと自称してしまうよ

うなことが起こってしまうことに最も神経を使いました。

私たちキリスト者が信じ知っていることというのは、世の知恵や世の力では到底理解出来るものではなく、聖霊なる神様のご介入がない限り、どうやってみても受け入れられるものではありません。

なのに、博識なパウロの言葉に魅了されて「ああ、キリスト教とは、キリスト教信仰とはこういうものか！」と分かった風になっていたなら、それはすべてパウロの自身のせいだと言うのです。

実際、コリント教会では、イエス様に会った風、信じた風、知った風になって、「パウロにつく、アポロにつく、ペテロにつく、私が正しい、あの人が間違っている」と教会内に分派が生じ、愛よりも自分の正しさを主張する方々が多数いたようです。

わたちがクリスチャンとなり、クリスチャンとして知っていること、信じていることのすべては、知識、うんちく、教養、または経験によって悟ったものではありません。

皆さん、こんなことを思ったことはないでしょうか？

「もし神様が、今も昔のように海が割れるとか、割れた海を歩くとか、天から食べ物が降ってくるとか、雲の柱と火の柱が現れる等の奇跡をバンバン起こしてくださったら、信じる人たちがどんどん増えるだろうに・・・」

私は思ったことがあります。

でも人は、高々目に見える奇跡ごときで悔い改めるほど、やわな罪人ではありません。

死を前にしても悔い改めない程の根深い心底罪人であるため、もし神様の奇跡を目の当たりにしたとしても、「そんな馬鹿な話があるか！」と、むしろ突っぱねます。

人は、奇跡を見たとか奇跡を体験したから悔い改めるのではなく、主がその心に直接触れて振り向かせ、聖霊なる神様がその人の魂を、その人の霊を蘇生させながら、その人の霊が心が変わった、イエス様に明らかに向くようになったという事件をお与えくださるから悔い改めるのであって、物理的な奇跡体験が、私たちを変えるわけではありません。

物理的なものや物質的なもので、私たち、神様に心をそう簡単に向けるほど、生やさしい罪人ではありません。

奇跡が私たちを変えるのではなく、聖霊なる神様が、私たちの心を霊を変えて下さいます。

もし、人が聖霊によって変えられた心を持つならば、奇跡を見てもその中に神

を見、奇跡でないものを見てもその中に神様を見ます。

でも、聖霊によって変えられていない人は、奇跡を見ても偶然で、奇跡でない者を見たならば、それは全くもって取るに足りない物でしかありません。

聖霊のご介入によって新しく生まれた人には、そこに神の、イエス様の御手を見て聞くことが出来ますが、そうでない人には見えず、聞こえません。

またさらには、信仰的にもっと深い進展と境地に行くために、（もちろん私たちが努めなければならないことがあります、）その進むべき道を照らして下さることと、適切な然るべき目的をもって私を導き、悟りをお与えくださらなければならぬ聖霊の導きを強力に求めなければなりません。

第一コリント 2：8 から見てみましょう。

Part Four

コリント人への手紙 2：8－12（パウロ）

私たちが目で見たこともなく、耳で聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだためしもない天上のすべての霊的祝福を知り、そこに希望を抱けるのは、聖霊なる神様のご介入、注ぎ、満たし、臨んでくださったことによって、新しく生まれさせていただいたからです。

洗礼を受けたとか、受洗証明書を手にしたとか、クリスチャンホームで育ったからとか、神学校で学んだからとかではありません。

だからこそ、私たちは当然のように、知恵と啓示の御霊を求めなければならないのです。

かと言って、私の立てた計画、私の立てた目標、私の望む結果を得る手段として神の力を求めることは、聖霊を求めることではありません。

世の悦楽のために、自分の名誉のために、自分の栄光と目的を得る方法として聖霊を求めるならば、所謂人が作り出した世の宗教と何ら変わることもなく、そのような求め方を、聖書は詐欺と言います。

聖書は、「私たち人間は元々神のかたちに造られた存在で、神との交わりを目的に造られたために、人間の存在価値と存在目的は、神の栄光に参与することだ」と教えてくれます。

「私の栄光のために神に参与させるのではなく、神の栄光に私が参与する生き方が、本来あるべき人間の栄光の存在価値と栄光の存在目的を全うすることになる」と言うのです。

だから、私たちは、何をすべきなのか、どうやって生きるべきなのかと言うすべての問題について、毎日毎日、瞬間瞬間、聖霊様の助けを求めてしかるべきで

すね。

前回のメッセージの中で、「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、あなたがたの必要なものすべて、それに加えられて与えられます」というイエス様の言葉の真意は、私たちが願っているものすべてを神様がお与えになるということではなく、『神様、神の国と神の義を求めますので、それ以外のものは一切必要ありません』と祈れますか？ 祈れるようになることをわたし（イエス様）は願っているし、そう祈れるようにわたしがあなたがたを変えます」ということだとお話ししました。

じゃ、具体的に、神の国と神の義を求める祈りって何でしょう？

例えば、我が家にも進むべき進路のために祈っている子供たちがいますが、親として子供たちのために祈る時、「主よ、どうか我が子を合格させてください。そして、それがあなたのご栄光となり、神の国と神の義のためになりますように」という祈りと、

「主よ、我が子は我が子である以前に、主がお造りになり、主が目的をもって、主がこの世に生まれさせてくださった命です。

あなたがこの子に持つておられる目的と目標と期待がお有りだと確信いたしますので、どうかあなたの目的に適った選択を本人がし、また親としてその選択を助けることが出来ますように、聖霊なる神様、知恵をお与えください」という祈り、どちらが神の国と神の義を求める祈りでしょうか？

前者には、神の国と神の義という言葉が出てきましたが、後者には神の国と神の義という言葉は出てきません。

あるいはまた、「主よ、私は今どうしてもこの道に進み、この道で成功をしなければなりません。

どうか、この道に進んで手にした成功をもって、あなたにご栄光を帰し、そこに神の国と神の義が現れるようにしてください」という祈りと、

「主よ、私はあなたの御手によって造られ、練られ、導かれている命です。

あなたが私に望んでおられることがあると信じますから、どうかあなたの願うことを私の願いとし、あなたの喜ばれることを私の喜びとし、あなたが望まれることを選び取って行けますように、知恵と啓示の御霊をお与えください」という祈り、どちらが神の国と神の義を求める祈りでしょうか？

二つの祈りとも、前者と後者、似ているような祈りですが、全然違います。

二つの祈りとも、後者の祈りが、神の国と神の義を求める祈りです。

Part Five

「天の御国では、誰が一番偉いのですか？」というとんちんかんな質問を、弟子たちがイエス様にしたところ、イエス様が幼い子呼び寄せて、「まことに、

あなたがたに言います。向きを変えて子供たちのようにならなければ、決して天の御国に入ることは出来ません」とおっしゃいました。

ここで言う子供たちとは、どういう意味でしょう。
純粹とか、人懐っこいとかということではありません。
価値や目標において、自らの主張がないということです。

大人とは、自分の人生の目標と価値を、自分なりにもうすでに決めている人たちです。

そういう人たちは天の御国に入ることが出来ません。
なぜでしょうか？

天の御国とは、私たちの考え、私たちの要求とは、全く関係のないところだからです。

神様が治め、神様が認め、神様が要求される方式以外では入れないところです。
私たちが決めるところではないですね。
だから、向きを変えて、子供たちのようにならなければならないんです。

つまり、お尋ねしなければなりません。そして、聞かなければならないんです。
「そこに入るためには、どのようにしなければならないのでしょうか？　そこで賞を得、朽ちない冠を受けるためには、どのように生きればいいのか？」と、尋ねなければならぬところが神の国です。

「無邪気で、天真爛漫でありなさい」ということではなく、聞かなければならないんです。

「何をすればいいのでしょうか？　あなたがお喜びになることは何でしょうか？　あなたがお喜びになることを、私はどのようにすればいいのでしょうか？　教えてください」と尋ね、聞くんです。

だからこそ、知恵と啓示の御霊の導きを受ける必要があるんです。

Conclusion

だからと言って、神様は私たちを消耗品として、呼び出したわけではありません。

神様がやらなければならないどぶ掃除を、その手が汚れるからと言って、私たちを呼び出して代わりにさせるための存在として、私たちをお造りになったわけではありません。

神様は私たちの存在そのものを何よりも喜ばれ、私たちと交際する、交わることを喜びとされたために、私たちをお造りになりました。

私たちは、神様の喜びを一手に受ける存在であり、神の御前でその喜びと栄光

を共に享受するために造られた存在です。

だから、神様を知るために召され、神を知り始めました。

私たちの経験や知識ではなく、聖霊なる神様が光をもって照らし、知らせてくださらなければ知ることの出来ないものを知る存在となりました。

私たち、視力がいいからと言って、すべてが見えるわけではありません。

どんなに視力が良くても、光がないならば、何も見る事が出来ません。

それと同じように、私たちが聖霊によって新しく生まれたからには、聖霊様に道を照らしていただかなければ、私たちは見えていないのと同じことです。

私たちが今いるところから、私たちに期待しておられる目標を神様がご計画され、栄光の場へと導いておられることを知っているならば、神様と歩調を合わせるために求めるんです。

知恵と啓示の御霊を求めるんです。

そうして、教えていただき、悟らせていただいたことを練習し、神様に訓練されながら生きていくんです。

これが、パウロの献げた「神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」という祈りの意味です。

聖霊を求めて祈っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：コリント人への手紙第一 2：12